The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ビルマ作家たちの「日本時代」
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 285-311
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ビルマ作家たちの「日本時代」
“Japan Khit” (The Days of Japanese Occupation in Burma) for Burmese Writers

南　田　みどり*
MINAMIDA Midori

Abstract:

Burmese Writers passed so called “Japan Khit” (1942-45, the literally meaning is ‘the Japanese days’) in several ways. Although few went abroad and joined anti-Fascist activity, most of them stayed in their mother country. While some of them continued writing and publishing, the others put down their pens. Furthermore some took part in the organizations established by Japan and the others did not take part in them at all.

In this paper two lists are presented. The List I is in principal the roster of Burmese writers who wrote books or articles in “Writer”, the periodical magazine for Burmese Writers’ Association in this period. The List II is the catalogue of books published in this period.

The List I also involves those who took part in the Writers’ Association and cultural activities in the public organizations or those who operated publishing and printing businesses. The personal histories of some writers are unknown still now. There is a possibility that they used unknown pen names. Such pen names are frequently found in “Writer” [Minamida 2011a].

In addition the List I makes no mention of their Anti-Fascist activities. Any more research might well be needed except [Minamida 1987] [Minamida 1994]. It should be left as the task hereafter.

Keywords： Japanese Military Occupation, Burmese literature, a Who’s Who, writers, publication
キーワード： 日本占領期，ビルマ文学，人名録，作家，出版

日本占領期（1942-45）は，ビルマで一般に「日本時代」と称される。「日本時代」における作家･ジャーナリストなど文学・出版関係者の動向は，多岐にわたる。彼らのうち，少数者は国外に拠点を求め[1]たが，大多数は国内にとどまった。それら大多数の中でも，

＊　大阪大学世界言語研究センター・教授
1　代表的な作家としては，留学中に大戦を迎え連合軍に協力したニョウミャや，抗日活動のために陸路インドへ亡命したテインペーミンがあげられる。後者については[Minamida 1987]　[南田

英領時代同様に執筆を続けた者や出版にかかわり続けた者がいる一方で，ペンを置いた者もいる。さらには，日本軍が設置した組織において勤務あるいは活動した者もいれば，それらに一切かかわりを持たなかった者もいる。

筆者は，現時点で収集可能となった範囲で，「日本時代」に出版された文学作品やビルマ作家協会機関誌『作家』1号から11号までの記事の内容的分類を試み，それらの果たした役割に言及してきた[2]。ビルマ国内においては，現在に至るまで，これらについてのまとまった叙述は存在していない。それを踏まえ，「日本時代」における文学・出版関係者のさらなる足跡をたどるべきところであるが，それに先立ち，当時執筆や出版にかかわった者たちの動向を一覧にまとめておく作業が必要と考える。

近年ビルマの出版界にあっては，作家人名録[3]の出版が充実しつつある。それらでは，作家たちの「日本時代」についても若干の言及がある。しかし，そこに記される作家たちの「日本時代」の活動記録や役職名には，不正確な記述も散見される。さらに，「日本時代」に出版された書籍の著者や『作家』の執筆者たちの中にも，人名録に掲載されていない者たちが存在する。当時一定の足跡が確認できる作家が，現代の人名録に記載されないことは注目に値するが，そこには，現代に至るも尾を引くビルマ側の諸般の事情が存在することがうかがえる[4]。

本稿では，ビルマ国内でいまだ曖昧なままに放置されている日本占領期の文学研究の空白を埋める意味で，執筆や出版等にかかわった者，あるいはかかわった可能性のある者を，表I日本占領期の文学･出版関係者に提示する。

表Iの中心をなす者は，第一に『作家』掲載記事執筆者やこの時期の新刊書籍の著者である。この中には，日本占領期における経歴の明確な者，実在は確認されるが経歴の不明な者，実在が確認されない者などが含まれる。原則として，英領時代から執筆している者を提示したが，この時期から書き始めた者も若干含まれる。『作家』や出版書籍以外の新聞や刊行物については，資料収集が不十分であるため，ここでは扱わない。

第二に，この時期に著作は見出せないが，作家協会，出版，政府関係（情宣・検閲）の活動･業務かかわった者である。

第三に，英領時代から執筆している作家で，たとえば東亜青年連盟[5]など日本側が設立した組織において何らかの活動の記録が確認される者である。

第二と第三の者たちも，別名でこの時期に執筆した可能性が十分考えられる。また英領

1994]を参照されたい。

2 [南田2010a][南田2011a]を参照されたい。1942年9月に再建されたビルマ作家協会は，以下作家協会とのみ記す。なおビルマとミャンマーについては[南田2011a : 153]の注27も参照されたい。

3 たとえば[Soe Nyunt 2005]は，20世紀の代表的作家100名を収録する。また，[Pyanchaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana Sati Aphwe 2003]から[同2008c]までの6巻は20世紀の作家計539名を収録し，[同2008d][同2009]は軍出身作家（前著と重複する者がある) 183名を収録する。

4 主として考えられる事情は，日本占領期に始まり現代でも継続される検閲の問題であるが，検閲における削除･修整の実態については[南田2010b][南田2011b]を参照されたい。

5 1942年6月に日本軍が青年層の組織化のために設立し，1943年には210支部，会員2万に拡大した。ビルマでは，‘Asha Lunge’ (アジア青年) との略称の使用が多いが，『植民地期歴史辞典』[Mya Han 1981]では，日本語の「東亜青年連盟」に対応する ‘Ashe Ashataik Lunge Asiayon’ が正式名称として使用されるため，本稿でもこの呼称を用いる。

期から執筆歴があるが，日本占領期の国内における活動の記録が確認されない者は，執筆の可能性が全く否定できないわけではないが，紙面の関係で表Iからは除外している。なお，日本占領期末期には抗日活動に密かに転じた者が少なからず存在したが，作家たちの抗日活動については運動全体から位置づけることも必要であるため，ここでは言及しないこととする[6]。

表Iの中心をなす者が新刊書籍の著者ならびに『作家』執筆者であるため，本稿ではこれらの作家が執筆した書籍のリストを表II日本占領期出版書籍として提示した。ここでは，日本占領期出版書籍を出版年別に，(1) 1942年新刊書籍，(2) 1943年新刊書籍，(3) 1944年新刊書籍，(4) 出版年の確定ができないが占領期出版の可能性が高い書籍の4種に分別する。そして，それぞれの下位区分をジャンル別に，Aフィクション，Bノンフィクション，C翻訳として示している。

これらの著作を表Iでは，出版年の表示番号，ジャンル表示記号，書籍番号の順で示す。たとえば表Iの4.チョーの項で(2)B1,2,3,4,5,6とされるものは，表IIの(2)1943年新刊書籍のBノンフィクションの項における書籍番号1,2,3,4,5,6をさす。表Iの8.チョーティンの項で(4)A2とされるものは，表IIの(4)出版年の確定ができないが占領期出版の可能性が高い書籍のAフィクションの項における書籍番号2をさす。

また，表Iにおいて示される『作家』掲載記事は，[南田2011：160-169]における表5『作家』掲載記事一覧を参照いただかねばならない。たとえば表Iの7.チョーゾーの項で，『作家』3-13とされるものは，『作家』3号の掲載記事13番をさす。同じく5-5は『作家』5号の掲載記事5番をさす。

表Iの掲載者は述べ182名にのぼった。このうち，筆名とは別に本名で役職や官職に従事している者は，それぞれ別に項を設けた。たとえば，36.はゼーヤという筆名が著名であるため生年没年も記しているが，彼は本名のヨーで役職･官職に従事しているため，133.にも別項を設けている。また複数の筆名を有する場合も，筆名ごとに項を設けて作品等を表示している。たとえば35.ザワナには165.テインの名でも著作がある。これらの重複を除外すると実質的な掲載者は161名となる。

表Iに関して特記すべき事項は少なからず存在するが，本稿ではその指摘にとどめることとする。第一に，著作多数の者についてである。たとえば，35.ザワナは本名165.テインとを併せ著書5点，97.マハーチョーは本名137.ヤンアウンとを併せ著書8点と『作家』掲載記事4点，98.マハースエーは別名131.ムントーターとを併せ著書7点と『作家』掲載記事6点，103.ミンスエーは別名14.キンソンとを併せ著書5点と『作家』掲載記事2点，111.メーミョ・マウンは別名145.シュエーアとを併せ著書5点と『作家』掲載記事2点，116.ティンカーは著書1点と『作家』掲載記事8点，123.ミャダウンニョウは著書3点と『作家』掲載記事6点，146.シュエーウダウンは著書2点と『作家』掲載記事7点，158.トゥカは著書4点と『作家』掲載記事2点，175.アウントゥーは著書2点と『作家』掲載記事5点がある。

6　ビルマ側の人名録等で抗日への協力あるいは活動への参加が明示される者は，表Iの2,21,24,71,73,94,123,136,140,148などである。このほかにも存在する可能性がある。

このうち123.を除く全員が小説を中心に執筆している。彼らは日本占領期の代表的な作家ととらえるべき者であるが，このうち111.と175.は現在のところビルマ側の作家人名録には掲載されていない。

第二に，実在が確認できなかった者についてである。現代の人名録に掲載されない場合は，作家たちの回顧録等で実在確認を行った。しかし，現時点で回顧録等にもその名が見出せない作家が28名いる。有名作家が，広く知られる筆名を使用せず，新たな筆名をこの時期に限って用いた可能性も存在する[7]。また，全体の中で女性作家は13名であるが，その中でも実在が確認できなかった者が2名いる。男性作家が別名を使用した可能性も考えられる[8]。ちなみに女性作家のうち4名は，夫ともども出版にかかわっている。今後新たな事実が判明する可能性もあるので，実在の確認は継続的な検討事項と考える。

第三に，出版社・印刷会社の経営に従事する作家が少なくないことである。4.の作家のカウィメイスエー社は7点の刊行に，13.と179.の夫妻のダゴン･キンキンレー出版社ならびにタインピェピュ印刷会社は10点の刊行に，21.のジャーネージョー社は3点，148.のチーブワーイエー社は6点，111.のマウン・ミャンマー出版社は2点，113.のミャンマー・ヨウッシン出版社は4点，158.のチャンダー社は3点，137.のタンタン社と98.のキンエーチー出版社はそれぞれ1点の出版にかかわっている。なお98.111.137.の作家は，上述のように著作も多数である。また148.は妻173.ともども著書を著すとともに，マンダレーを拠点とした数少ない印刷・出版事業者であったことにも注目すべきである。日本占領期に作家たちが執筆のかたわら，検閲対策，紙不足対策に呻吟しながらも，出版事業にもかかわっていたことの意味合いには改めて考察の余地があろう。

第四に，諸団体にかかわりを持った実在作家についてである。作家協会関係者は，会員，名誉会員[9]，執行委員，文学賞審査員などを含めて61名[10]である。そのほか，東亜青年連盟にかかわった者は14名，政府教育衛生省教育局[11]文学図書分局やビルマ学芸院[12]など官製の文化・学術的団体にかかわった者は12名，厚生宣伝省[13]などの省庁，枢密院顧問官[14]，

7 [南田2011a : 159-160]を参照されたい。「日本時代」限定の別名の使用は作家協会でも推奨された。それは日本軍の検閲への対策のみならず，対日協力的記事執筆における「協力」の証拠を残すことを潔しとしない意志の表れと見ることも可能である。なお記事内容等から表Iの148.の作家が134.151.と，38.の作家が39.と同一人物であることは推測される。

8 すでに103.ミンスエーが14.キンソンという女性名を筆名として使用していることが判明している。なお15.キンソンは女性作家であるが，14.とは別人である。

9 [太田1967 : 202]では「賛助員」なる語を使用している。ビルマ語では長老との意味の‘nayaka’が使用され，ここではむしろ「名誉会員」に相当すると考えられるため後者を使用している。

10 『作家』10号会費納入者名簿には115名が，11号には56名が，合計171名が連絡先等とともに掲載される。紙面の関係もあり，会員であるのみでほかに特記事項がない者は原則として表Iに記載していない。15.のみは14.との関係で記載した。注8も参照されたい。

11 1943年8月，日本軍の傀儡政府「ビルマ政府」が樹立された。ビルマ政府教育衛生省教育局は，[太田1967 : 578]によれば教育，国立図書館･美術館等に関する事項，古文書の保存，翻訳などを所管事項とした。

12 1943年3月，ビルマ中央行政府が設立したもので，国語辞典部と百科全書部から成った。ビルマ語名は‘Pinnya Dagun Athin’ (知識の幟協会)とされる。

13 [太田1967 : 579]によれば政府厚生宣伝省には宣伝局，国家奉仕局，民防衛訓練所，印刷局，宗教局などが設置され，宣伝局が新聞雑誌及び書籍の統制，宣伝及び情報，放送映写，映画の検閲，劇場及び映画館に関する事項，文書の検閲などを扱っていた。

14 1943年8月の「独立」とともに設置された。国家の重要事項につき国家代表の諮問に応じ，議長副議長のほか18名で構成された。

宣伝諮問委員[15]など政府関係の要職にかかわった者は24名である。作家たちと各種団体のかかわりの詳細については，まだ不明な部分が少なくない。今後さらに回顧録等を用いた吟味が必要となろう。

資料のさらなる収集とあわせ，以上の四点をさしあたり今後の課題として列挙した上で，表Iでは，作家たちの「日本時代」すなわち，日本占領期における文学関係者の足跡の概観を示すこととする。

表I　　日本占領期の文学･出版関係者

1. 人名の配列は，ビルマで刊行されている辞典類の配列同様，ビルマ文字表の配列に従う。ローマ字表記の人名において，冠称，敬称，称号等を除く名前[16]の部分に下線を付す。下線部第一音節の語頭子音はおよそ以下のように配列される[17]。なお，語頭子音に続く母音の配列順は/a,i,u,e,o/など[18]とする。また閉音節語は開音節語の後に配列され，語末子音として用いられる文字の文字表配列に従う。口蓋化音，唇音化音を表す/y,w/などの介子音は，語頭子音の次に配置する[19]。なお，一般にビルマ国内で使用されるビルマ人名や地名には特殊なローマ字表記を用いることが少なくなく，本稿でも可能な限りそれらを尊重している。

   [K][Kh][Ng][S][Hs][Z][Ny][T][Ht][D][N][P][Ph][B1][B2][M][Y1][Y2][L][W][Th][H][A]

2. 配列番号の次には，人名のカタカナ表記[20]を配する。(　)内は冠称・敬称・称号等である。(　)の後の＃は実在不明，＊は女性を示す。それに続く人名のローマ字表記の下線部が，(　)の前の人名カタカナ表記に対応する。
3. 判明している場合は　＜　＞内に生年没年を，《　》内に本名を入れている。年号の後の生は生存中を，生年のみの場合は生没不詳を示す。別の主な筆名がある場合は

15　1943年8月の「独立」により，厚生宣伝大臣を委員長として12名で構成された。

16　ビルマ人には姓がない。名前の前に冠称ウー(年輩あるいは社会的地位のある男性)，ドー(同女性)，マウン(若い男性あるいは卑称)，マ(同　女性)，サヤー(男性教師)，サヤーマ(女性教師)の他，敬称たとえばタキン(主人との意味で，1930年創設の我等ビルマ人協会会員が使用した)，テイパン(学位)，ダゴン(出版雑誌名)，ピー(出身地)などを随時つける。同名者が多いため識別する目的もある。

17　この配列はインド系文字を使用する言語に共通するものである。またビルマ語は[B][Y]にそれぞれ二種類の文字を有するため，本表は[B1][B2]など番号を付して識別することとした。

18　母音/e,o/にはそれぞれ広口母音と狭口母音の二種類があり，配列順は，e(狭)e(広)o(広)o(狭)とされる。また開音節，閉音節を問わず三つの声調が存在し，第一，第二，第三の声調の順に配列される。

19　最も人名を多く配列する[M]の項を例にとれば，96.から102.のma,mar,meは開音節の声調の順序による配列であり，103.から117.のmin,maung,manは閉音節の語末子音の順序による配列である。118.から131.のmyo,mya,myint,myat,moonは口蓋化や唇音化の介子音を加えたうえでの閉音節の語末子音の順序による配列である。なお，同じ介子音の/y/でも，118.から121.までのmyと，122.から130.までのmyとでは文字記号の異なるものを用いるため，区別して配列している。なお配列の詳細については [原田1990：凡例][大野2000：凡例]を参照されたい。

20　人名のカタカナ表記は[太田1967]とは若干異なる。さらに本表は[南田2010a][南田2011a]における表記とも一部変更がある。すなわち，無声化を示す/h/はカタカナ表記では省略して，たとえばフマをマに，フラをラに，フニンをニンなどとしている。また二重母音のオウンをオンとしている。なお二種類の/o/のうち狭口はオウ，広口はオーと表記し，二種類の/e/は狭口広口ともにエーと表記しているのは従来どおりである。

《　》の右に示す。

4. 次に，著書がある場合は，表IIで示した発行年番号とジャンル記号と配列番号を，『作家』掲載記事がある場合は，号数と記事番号を記す。
5. 次に，作家協会に関する事項，その他出版関係の事項，公的な機関に関する事項を記し，印刷・出版社経営の場合はその名を挙げる。
6. 最後に，参照すべき別名や本名等をその配列番号とともに挙げる。

[K]

1. クマーラ (ウー)＃　U Kumara　『作家』5-19　バテイン市ヤンゴン僧院仏法講師
2. コウドーマイン (タキン)　Thakhin Kodawhmaing＜1857－1964＞《マウン・ルン》ミスター・マウンマイン　作家協会42年43年名誉会員　43年5月ビルマ独立準備委員会[21]委員　同年8月政府枢密院顧問官
3. チョー (サヤーマ・マ)＊　Hsayama Ma Kyawt《同》　44年日本ビルマ協力実話小説でGreater Asia賞[22]受賞　カレン族
4. チョー (サヤー／ウー)　Hsaya Kyaw / U Kyaw《同》クンユエーダン・サヤードー　(2)B1,2,3,4,5,6　作家協会42年執行委員・43年図書小委員会委員長・文学賞候補作品収集担当　カウィメイスエー社経営
5. チョー (ジャパンピャン・ヤカイン)＃　Japanpyan Yakhaing Kyaw　(1)B1
6. チョーザン (マウン)　Maung Kyaw Zan《同》44年日本ビルマ協力実話小説でGreater Asia賞受賞
7. チョーゾー (無/マウン)　Kyaw Zaw / Maung Kyaw Zaw　『作家』3-13,5-5　43年作家協会作文コンテスト[23] 特別賞受賞　参照48.ティンテー　176.アウンミン
8. チョーティン (テイッパン)　Theikpan Kyaw Htin　(4)A2　『作家』3-21
9. チョーミン (ウー)　U Kyaw Myint＜1898－1988＞《同》　作家協会会員・43年法律顧問　弁護士
10. チョータウン (セッムレッムタッイン)＃　Sethmulethmutatyin Kyaw Thaung　『作家』9-13　BNA[24] 工兵隊本部所属
11. チーチー (ドー)＊　Daw Kyi Kyi　(3)B1

[Kh]

12. キンキン (ピー)＊　Pyi Khin Khin＜1909－95＞《ドー・キンキン》　『作家』10-14　作家協会会員

---

21 1943年5月に設置され，バモーを委員長として，ビルマ国民の各方面を網羅するとされる委員23名で構成された。
22 受賞者名は[Shwe Hmya 1972 : 454-457]に掲載され，実在人物と考えられる。同賞を主催した“Greater Asia” 紙は1943年2月より週3回発行された英字新聞である。
23 1943年2月に実施された。注54も参照されたい。
24 1943年8月の「独立」によって，ビルマ防衛軍を改変して設置されたビルマ国民軍Burma National Armyの略称である。

13. キンキンレー (ダゴン)＊　Dagon Khin Khin Lay＜1904－81＞《ドー・キンレーキン》(1)A1　(3)A1　(4)A1　作家協会42年執行委員　ダゴン･キンキンレー社経営　タインピェピュ印刷社を設立し『バマーキッ』[25] 紙の印刷を請け負う　夫・181.オンキン
14. キンソン　Khin Hsong　『作家』5-24,10-16　参照103.ミンスエー
15. キンソン＊　Khin Hsong＜1925生＞《ドー・ミンタン》　作家協会会員
16. キンマウン (マウン)　Maung Khin Maung《同》　44年日本ビルマ協力実話小説でGreater Asia賞受賞
17. キンマウン (ダヂーガゼット・ウー)　Thugyi Gazzatte U Khin Maung＜1892－1952＞《ウー・キンマウン》トーダー　作家協会42年43年名誉会員　ビルマ学芸院ビルマ百科全書部責任者・ビルマ語辞典部校閲顧問
18. キンミョウチッ＊　Khin Myo Chit[26]＜1915－99＞《ドー・キンミャ》　作家協会42年43年執行委員　BDA[27] 本部勤務
19. キンレーマウン　Khin Lay Maung＜1918－2002＞《ウー・マウンマウンガレー》文学出版局[28]長
20. チッペー (ウー)　U Chit Phe《同》　44年日本ビルマ協力実話小説でGreater Asia賞受賞
21. チッマウン (ジャーネージョー・ウー)　Journaljaw U Chit Maung＜1912－46＞《同》シュエーリンヨン 作家協会42年執行委員・43年講演会小委員長・『作家』編集責任者・文学賞規定作成委員　43年政府宣伝諮問委員会委員　妻・96.ママレー
22. チッタウン (ウー)　U Chit Thaung《同》　作家協会43年文学賞科学部門審査員･文学賞規定作成委員

[Ng]

23. グエーターイー＊　Ngwe Tar Yi＜1925－58＞《ドー・キンイー》　『作家』4-25　43年同好者の手書き雑誌[29]「新しい櫂」に初の詩を掲載　夫・105.ミンユウエー

[S]

24. ソーウー　Saw U＜1919－91＞《ウー・ソーウー》　(4)A3　42年『ジャーネージョー』誌[30] 編集者を経て『バマーキッ』紙編集者　東亜青年連盟チャンキン支部教育部長

25　『バマーキッ』(ビルマ時代)は，ビルマ行政府情報宣伝局が1942年10月より発行したビルマ語日刊紙である。
26　[kh]と/y/の結合形は[ch]と表記され，特殊な発音となる。
27　1942年7月にビルマ独立軍を縮小再編して設置されたビルマ防衛軍 Burma Defence Army の略称である。
28　[Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana Sati Aphwe　2006：39]による。文学出版局という用語はこれ以外に見出せず，教育衛生省教育局文学図書分局の可能性も考えられる。
29　当時若者たちが厚紙に挿絵や記事を書いて綴じた手書き雑誌を製作し輪読されていた。
30　『ジャーネージョー』(卓越せるジャーナル)は1941年5月よりジャーネージョー・ウー・チッマウン(21.参照)が発行した週刊誌である。

25. ソウ (タウンドゥイン)＃　Taungdwin Soe　『作家』7-28
26. ソウ (ターガヤ・ガ)　Targaya Nga Soe＜1915頃－98＞《ウー・ソウマウン》 (3)C1　『作家』1-7,7-18,8-20　作家協会図書館担当　Greater Asia紙編集部　43年BDA厚生局広報担当官
27. セッチャー (ピー)　Pyi Setkyar《ウー・トゥンミン》　『作家』9-18　作家協会会員
28. サンマウン (ウー)　U San Maung＜1916＞《同》　(2)B7
29. セイン (チーダウンカン・サヤー)＃　Kyidaungkan Hsaya Sein　『作家』2-13
30. セイン (トウーテッイエー・ウー)　Toetetye U Sein＜1897－1978＞《ウー・パヂーゴウ》　作家協会会員　生活協同組合[31] 議長　『トウーテッイエー』誌[32] 編集長を経て43年政府宣伝諮問委員会委員
31. セイン (バンドゥラ・ウー)　Bandula U Sein＜1900－76＞《ウー・セイン》『ミャンマー・アリン』紙[33] 編集長『バンドゥラ』[34] 主宰者を経て42年8月ビルマ行政府[35] 土木復興部長官　43年4月独立準備委員会委員　43年8月厚生宣伝大臣　戦時対策委員会[36] 委員　宣伝諮問委員会委員長　国家奉仕諮問委員会[37] 委員長
32. セイン (ミャンマーアリン・ウー)　Myanmar Alin U Sein＜1870－1942＞《ウー・セイン》　作家協会42年名誉会員　『ミャンマー・アリン』紙編集長を務めるも42年11月死去

[Hs]

33. サカーヂー (テイッティン)　Hteiktin Hsakagyi＜1911－43＞《ウー・タン》　(4)A4　『作家』10-10　作家協会会員
34. スエーティン (マウン)　Maung Hswe Tint＜1917－82＞《ウー・ティンスエー》ジャーネージョー・ティンスエー　『作家』2-8

[Z]

35. ザワナ　Zawana＜1911－83＞《ウー・テイン》　(1)A2,B2,(2)A1,(4)A5　作家協会42年書記長・43年執行委員・『作家』誌編集補佐　参照165.テイン

---

31 すでにビルマでは1904年より生活協同組合事業が発足し，1930年代には停滞するも，日本占領期に共同購入共同売却が推奨された。
32 ウー・セインは1933年に『トウーテッイエー』(進歩)誌，1938年に『トウーテッイエー』紙，1939年に『トウーテッイエー』ジャーナル等を出版して編集長も務めた。
33 『ミャンマー・アリン』(ビルマの光)は1914年に創刊され，日本占領期は『トゥリヤ』(太陽)と並んで42年3月から45年4月頃まで発行されたビルマ語日刊紙である。
34 彼は1920年から39年にかけて週刊誌『バンドゥラ』(英緬戦争時のビルマ側の将軍名) ならびに同名の新聞を発行していた。
35 [太田1967：349-353]によれば，1942年8月に日本軍政監指導のもとで設置され，バモーを長官としてビルマ人9名と日本人官房長(陸軍司政長官)で構成された。
36 [太田1967：410]によれば，1943年8月に設置された政府主要委員会のひとつで，戦時対策の要点を協議する官民一体の委員会として重要なものであり，委員長バモー以下19名で構成されていた。
37 [太田1967：584]によれば，1943年8月に設置された政府主要委員会のひとつで，厚生宣伝大臣バンドゥラ・ウー・セイン委員長以下14名で構成されていた。

36. ゼーヤ　Zeya＜1900－82＞《ウー・ヨー》　(2)C2,『作家』1-20,2-28　参照133.ヨー
37. ゾーヂー　Zawgyi＜1907－1990＞《ウー・テインハン》　『作家』1-24　参照166.テインハン

[Ny]

38. ニャーナ (ウー)　Nyana/U Nyana＜1902－69＞《ウー・オンマウン》　(2)A2, (3)A2 作家協会43年検閲担当執行委員
39. ニャーナ (アシン・カウィヤワースィー・ウー)＃　Ashin Kawiyawasi U Nyana　『作家』9-9
40. ニーニー (カートゥン・サヤー)　Cartoon Hsaya Nyi Nyi　『作家』3-20
41. ニョウニョウレー (テッカトウ)　Tekkatho Nyo Nyo Lay＜1922＞《ウー・マウンマウンモウ》　東亜青年連盟広報責任者
42. ニョウトゥン　Nyo Htun《マウン・バペー》　43年作家協会作文コンテスト特別賞 トゥリヤ社勤務　参照86.バペー　170.トンニャ
43. ニャン (サヤー)　Hsaya Nyan＜1897＞　44年「パーリ勝利の偈」によってパーリ語育成協会賞[38] 受賞

[T]

44. タロンセイン＃　Talong Sein　『作家』3-8
45. トーダーガレー (モーチュン)　Mawkyun Tawdhaglay 《コウ・オンチー》　トーダーレー　『作家』7-19,8-19　作家協会会員
46. テットウ (無/マウン)　Tet Toe / Maung Tet Toe＜1913－2003＞ 《ウー・オンペー》 『作家』2-15,3-14　参照182.オンペー
47. ティンスエー (ウー)　U Tint Hswe＜1906－53＞《同》　『タインチッ』紙[39] 編集者を経て43年厚生宣伝省次官
48. ティンテー　Tint Te＜1917－80＞《ウー・ウィンマウン》　43年教育衛生省教育局文学図書分局校閲担当　参照7.チョーゾー　176.アウンミン
49. ティン (ウー)　U Tin＜1897－1978＞《同》　『ミャンマー・アリン』支配人を経て42年ラングーン市治安維持会[40] 委員長　43年宣伝諮問委員会委員　枢密院顧問官　ビルマ商工会議所副会頭
50. ティン (ウー)　U Tin　43年厚生宣伝省厚生宣伝局編集者　参照144.シュエーミャー
51. ティン (ダゴン・サヤー)　Dagon Hsaya Tin＜1908－74＞　作家協会42年執行委員

38　パーリ語普及のためパーリ語育成協会が43年から設置した。44年は同協会の講演会・討論会の冒頭で唱ずる短い偈を募集した。[Shwe Hmya 1972 : 451]に全文が掲載される。
39　『タインチッ』(愛国)紙は1920年にマンダレーで創刊され，日本占領期は1942年5月に復刊し，1947年に廃刊となった。
40　[太田1967 : 71]によれば，42年3月に市政復活のため設置され，指導監督には平岡機関があたった。

52. ティンマウンヂー (タキン)　Thakhin Tin Maung Gyi＜1944頃没＞　作家協会会員　我等ビルマ貧民党[41] 宣伝部長 政府宣伝諮問委員　参照106.ミンレッウエー
53. ティンラ (ウー)　U Tin Hla＜1919－2004＞《同》　43-45年ビルマ学芸院ビルマ語辞典部執筆者　参照69.ナッヌエー
54. ティンウー＃　Tin U　『作家』10-15

[Ht]

55. ティン (マウン)　Maung Htin＜1909－2006＞《ウー・ティンパッ》　(3)A3　参照57.ティンパッ
56. ティンヂー (テッカトウ)　Tekkatho Htin Gyi＜1917－2004＞《ウー・ティンヂー》　『作家』3-15,5-12, 8-7, 9-8　作家協会会員　同盟通信編集補佐　43年教育衛生省教育局文学図書分局執筆・翻訳担当官
57. ティンパッ (ウー)　U Htin Phat　ラパッター市長を経て42年同市治安維持委員会議長　43年外務省広報担当次官補　44年厚生宣伝省次官補　参照55.ティン
58. ティンアウン (ドクター)　Doctor Htin Aung＜1910－78＞《同》　作家協会43年文学賞戯曲部門審査員　ラングーン大学英文科講師
59. テインウィン (ボウ)　Bo Htein Win＜1914－45＞《コウ・サウン》　BIA[42] を経て42年日本軍宣伝班所属　BDA・BNA勤務
60. トゥンセイン (ウー)　U Htun Sein《同》　43年厚生宣伝省宣伝局局長　宣伝諮問委員会委員　国家奉仕諮問委員会委員　中央労務局諮問委員会[43] 委員
61. トゥンペー (ウー)　U Htun Phe＜1900－77＞《同》　(1)C１　42年『バマーキッ』紙編集長　43年東京で開催の大東亜新聞会議出席　宣伝諮問委員会委員
62. トゥンテインガー　Htun Theinga<1911－1976>《ウー・マウンマウントゥン》　43年厚生宣伝省厚生宣伝局翻訳担当官　国家奉仕委員会広報責任者
63. トゥンラ (ボウ/ウー)　Bo Htun Hla, U Htun Hla　42年BIA入隊　42年6月東亜青年連盟設立にかかわりBDAを経て43年 国防省[44] 勤務　68.ネーウィン
64. トゥンエー (ナガーニー・ウー)　Nagani U Htun Aye　(2)B8
65. トゥンオウッ (タキン)　Thakhin Htun Ok＜1907－70＞《同》　(2)B9　42年BIA行政班長・行政機関[45]主席行政官　6月中央行政機関設立準備委員[46]　8月我等ビルマ貧民

41　我等ビルマ協会（タキン党）と貧民党が1942年8月に統合したものである。
42　1941年12月にバンコクで結成されたビルマ独立軍Burma Independence Armyの略称で，詳細は[南田2011：146]の注9を参照されたい。また59.の人物と日本軍宣伝班や検閲との関係については，[南田2009][同2011c]を参照されたい。
43　協力大臣ウー・トゥンアウン委員長以下11名で構成された。名簿は[太田1967：584]を参照されたい。また60.の人名はビルマ側の資料では現在のところ見出せず，作家ではない可能性もあるが，宣伝局長として検閲の責任を担う立場にあったため記載した。
44　陸軍，海軍，空軍を統括し，大臣はアウンサン司令官が兼任した。
45　1942年初頭よりBIAは，ビルマへ進入した先々で行政委員会や治安維持会を結成し，南機関は4月に彼を「中央政府」主席行政官に任じた。
46　日本軍は1942年6月にバモーを委員長として以下9名から成る中央行政機関設立準備委員会を設置して，BIA「中央政府」と南機間を解散させた。

党顧問　8月中央行政府森林部長官　43年4月独立準備委員会委員

[D]

66. デーワ (コウ)　Ko Dewa　『作家』2-22

[N]

67. ヌ (タキン／マウン／コウ)　Thakhin Nu / Maung Nu / Ko Nu＜1907－95＞《同》(2)A3　作家協会会員　43年4月独立準備委員会委員　8月外務大臣　宣伝諮問委員会委員
68. ネーウィン (テッカトウ・マウン)　Tekkatho Maung Ne Win＜1918－96＞　『作家』10-13　参照63.トゥンラ
69. ナッヌエー (テッカドウ・ネー)　Tekkatho Ne Nat Nwe　『作家』10-20,　参照53.ティンラ
70. ナッシン (ダゴン)　Dagon Nat Shin＜1898－1988＞《ウー・マウンマウンヂー》　『作家』1-16,3-11,4-21,6-11,11-11　作家協会42年43年副会長
71. ナンダ　Nanda＜1919－82＞《ウー・アウンチー》　作家協会会員　BIA・BDA・BNA勤務
72. ニンメー＊　Hnin May　『作家』11-9, 作家協会会員　東亜青年連盟員
73. ニンウー　Hnin U＜1922＞《ウー・エーミン》ミンケートゥ　東亜青年連盟マンダレー東部地区書記長

[P]

74. バーマウカ (ヤーザウィン)　Yazawin Bamaukka　『作家』10-7　参照84.バニュン

[Ph]

75. ペーマウンティン (ウー)　U Phe Maung Tin＜1888－1982＞《同》　41年ラングーン大学学長を経て43年5月－45年4月ラングーン大学行政組織議長　ビルマ学芸院ビルマ語辞典ビルマ百科全書編集事業管理小委員会委員長
76. ペーアウン＃　Phe Aung　『作家』5-3,15,11-18
77. ピューウィン＃　Phyu Win　『作家』6-3, 9-19

[B１]

78. バマー (マウン)＃　Maung Bamar　『作家』6-14

[B２]

79. バガレー (ウー)　U Ba Galay《同》　43年宣伝諮問委員会委員　『トゥリヤ』新聞社長
80. バチー (ナンマー・ウー)＃　Nanmar U Ba Kyi　『作家』10-6

81. バキン (チェーレッピュピンイエー・ウー)　Kyeletpyupinye U Ba Khin　『作家』7-26　作家協会会員　ハンダーワディー印刷会社勤務
82. バチョウ (ディードウ・ウー)　Deedoke U Ba Cho＜1893－1947＞《ウー・バチョウ》　『作家』7-11, 8-16,9-6　作家協会43年名誉会員　43年宣伝諮問委員会委員　枢密院顧問官
83. バスエー (ヤンゴン)　Yangon Ba Hswe＜1916－86＞《ウー・ラマウントゥイン》　『作家』8-14
84. バニュン (ウー)　U Ba Nyunt＜1906－92＞《同》　作家協会43年文学賞歴史部門審査員　同年厚生宣伝省宣伝局第一次長　44年5月大東亜諸国視察団員　参照74.バーマウカ
85. バティン (ダゴン・ウー)　Dagon U Ba Tin＜1893－1961＞《同》　映画界を経て43年国防省宣伝局軍事宣伝担当官・映画演劇監督
86. バペー (ウー)　U Ba Phe＜1906－87＞　作家協会会員　『トゥリヤ』紙編集者　参照42.ニョウトゥン　170.トンニャ
87. バイン (ハンダーワディー・ウー)　Hanthawaddy U Ba Yin＜1894－1977＞《同》　『作家』1-8　作家協会43年文学賞歴史部門審査委員
88. バシン (ウー)　U Ba Shin＜1915－70> 《同》　(3)B6　東亜青年連盟教育部長　ビルマ軍教育担当官
89. バタウン (タキン)　Thakhin Ba Thaung＜1901－81＞《ウー・バタウン》　作家協会43年文学賞演劇部門審査委員
90. バタウン (ウー)　U Ba Thaung＜1914－68＞《同》マウン・トゥタ／ボウムー・バタウン　(1)C2　43年3月－10月教育省教育局文学図書分局勤務　同年東京国際文化局で翻訳担当官として45年まで勤務　参照156.ティーリマウン
91. バタン (ウー／ピー・ウー)　U Ba Than/ Pyi U Ba Than　『作家』7-30, 8-3　作家協会会員　参照162.タン
92. ボウター (ウー)　U Bo Thar　作家協会43年文学賞科学部門審査員
93. ボウマッス (ヤダナーボン)　Yadanabon Bo Mat Su＜1912－87＞《ウー・トゥンライン》シュエーカインター　『作家』8-6　作家協会会員　東亜青年連盟ザガイン支部所属
94. ボンチョー (ナッマウッ)　Natmauk Bong Kyaw＜1920－2006＞《ウー・ボンチョー》　『作家』2-6,2-7　BIA・BDA・BNA勤務
95. ボンチュエー (ミョマ/ウー/無)　Myoma U Bong Kywe＜1921－48＞《ウー・ボンチュエー》　『作家』2-27,4-17,6-28　作家協会会員 日本語学校生徒自治会長　東亜青年連盟カマユッ支部長　43年『トゥリヤ』紙編集補佐　45年BNA厚生部勤務　叔父・79.バガレー

[M]

96. ママレー (ジャーネージョー)＊　Journalgyaw Ma Ma Lay＜1917－82＞《ドー・ティンライン》　(3)A4　夫・21.チッマウン
97. マハーチョー　Maha Kyaw　(4)A-6,7,8,9 参照137.ヤンアウン
98. マハースエー　Maha Hswe＜1900－53＞《ウー・バシェイン後にウー・バスエー》(1)A3, (2)A4,5,(3)A5,6,B2　『作家』2-20,6-4,7-10,11-6[47]　作家協会検閲担当執行委員　キンエーチー出版社経営　参照131.ムントーター
99. マーガ　Mar Ga＜1913－88＞《ウー・ターティン》『作家』1-12,2-14,3-27,4-22,5-6, 8-9,17,11-17　作家協会会員　ビルマ学芸院ビルマ語辞典部執筆担当
100. マーラー＊　Marla＜1915－2001＞《ドー・セインイン》『作家』3-10　東亜青年連盟ミングン丘陵支部副支部長・女性部長
101. メーメーセイン＊＃　Me Me Sein　『作家』11-5
102. メーミョウチッ＊＃　Me Myo Chit　『作家』9-21
103. ミンスエー　Min Hswe＜1910－49＞《ウー・チッライン》　(2)A6で43年作家協会文学賞を小説部門で受賞　(1)A6, (2)A7,8, (3)A8　参照14.キンソン
104. ミンヌエー　Min Nwe＜1911－1990＞《ウー・タンマウン》トーダーチー　『作家』7-21, 11-10
105. ミンユウェー　Min Yu Wai＜1928生＞《ウー・ウィンマウン》　42年東亜青年連盟手書き雑誌発行　44年同バテイン支部主催作文コンテストでエッセー部門１位　妻・23.グエーターイー
106. ミンレッウェー　Min Letway《タキン・ティンマウンヂー》　『作家』4-8 作家協会会員　参照52.ティンマウンヂー
107. ミンダー＃　Mindha　(3)B3　『作家』3-31, 4-11,11-4
108. ミントゥイエイン　Min Thu Yein　『作家』7-7,7-13
109. ミントゥウン　Min Thu Wun＜1909－2004＞《ウー・ウン》　『作家』1-21,2-17,3-29,4-19,5-26,6-29,7-29,9-5　その他『バマーキッ』紙にも多数執筆 参照152.ウン
110. マウン (カウィ)　Kawi Maung《ウー・キンマウンヂー》　『作家』11-8　作家協会会員　ミャンマー・ヨウッシン出版社勤務
111. マウン (メーミョ)　Maymyo Maung＜1910－98＞《ウー・ルンマウン》　(1)A5,(3)A7,『作家』3-30, 4-18 マウン・ミャンマー出版社経営　参照145.シュエーア
112. マウン (ミョマ)　Myoma Maung＜1903－83＞《ウー・アウンミン》　『作家』2-5,5-16, 7-6,10-17,11-16　作家協会執行委員　『バマーキッ』紙論説委員
113. マウンマウン (ミャンマー・ヨウッシン・ウー)　Myanmar Youkshin U Maung Maung　作家協会42年43年執行委員・会計監査　映画評論家　ミャンマー・ヨウッシン出版社経営

47　11-6は無署名であるがマハースエーの作であることが判明している。[南田2010：127]を参照されたい。

114.マウンマウンヂー (ウー／テッカトウ)　U Maung Maung Gyi / Tekkatho Maung Maung Gyi＜1914－82＞　教育省教育局文学図書分局執筆編集担当

115.マウンマウンキン (ウー/テッカトウ)　U Maung Maung Khin / Tekkatho Maung Maung Khin《ウー・マウンマウンキン》　43年作家協会作文コンテスト特別賞　東亜青年連盟文学コンテスト一位　『バマーキッ』紙編集者

116.マウンマウンピエー（ウー）　U Maung Maung Pye＜1909＞　『作家』7-17　作家協会会員　43年作家協会文学賞小説部門審査委員　『バマーキッ』紙編集者を経て政府厚生宣伝省宣伝局第二次長

117.マンティン (ミョオウッ)　Man Tin / Myo Ok Man Tin＜1917－97＞《ウー・トゥンティン》　『作家』5-23,8-4,9-12　行政官を経て42年BIA所属　週刊新聞『デルタ日報』[48] 編集者　BIA司令部幹部候補生徴兵・広報担当 同年8月より町長として45年3月まで各地歴任

118.ミョウニュン (タキン)　Thakhin Myo Nyunt　『作家』5-17, 6-10, 7-24　作家協会会員

119.ミョウミン (イエーナンヂャウン)＃　Yenangyaung Myo Myint　『作家』5-11, 9-3

120.ミョウミン (ウー)　U Myo Myint＜1910－95＞《ウー・ミョウミン》ヌエーソウ　43年バゴウ郡長　43-44年外務省次官補　43-44年大学生活協同組合議長　44年ラングーン大学英文学科長

121.ミョウタン (マウン/テッカトウ・マウン)　Maung Myo Thant / Tekkatho Maung Myo Thant《ウー・ラチー》　『作家』4-14, 6-18　作家協会会員

122. ミャカロウ　Mya Kha Louk《ウー・チャン》　『作家』10-22 作家協会会員　弁護士

123.ミャダウンニョウ　Mya Daung Nyo＜1915－83＞《ウー・アウンテイン》　(2)B13で43年作家協会文学賞を歴史部門で受賞　(1)B3, (3)B4『作家』1-23,3-2,4-7,5-2,7-9,9-17

124.ミャダウンタウン＃　Mya Daung Taung　『作家』8-13

125.ミャダウンイン＃　Mya Daung Yin　『作家』1-9

126.ミャミョウルィン　Mya Myo Lwin＜1920-70＞《ウー・バルィン》　(1)A7

127.ミン (ダーライター・サヤー)　Director Hsaya Myint＜1898－1970＞《ウー・ミン》『作家』3-20　作家協会会員『トゥリヤ』『ミャンマー・アリン』『バマーキッ』紙ピャーポン特派員

128.ミンスエー (ウー)　U Myint Hswe＜1917－96＞《同》　(2)B14で43年第一回パーリ語育成協会賞受賞　還俗後東亜青年連盟所属

129.ミャッソウ (ウー)　U Myat Soe　作家協会43年文学賞科学部門審査員

130.ミャッレーヌエー (ダゴン)　Dagon Myat Lay Nwe＜1911－91＞《ウー・エーグエー》『作家』6-9　BIA・BDA勤務　44年日本へ武官補として派遣

131.ムントーター　Moon Thaw Tar　『作家』4-3　参照98.マハースエー

48　1942年3月より短期間BIA行政委員会がエーヤーワディ・デルタのミャウンミャで発行した。

[Y１]

132.ユマウン (ウー)　U Yu Maung＜1913＞《同》　『ミャンマー・アリン』編集者を経てGreater Asia紙編集者

133.ヨー (ウー)　U Yaw　作家協会43年執行委員・文学賞小説部門審査員　教育衛生省教育局文学図書分局校閲担当官　参照36.ゼーヤ

[Y２]

134.イエードゥー＃　Yedhu　『作家』4-15, 6-24, 7-8

135.イエートゥッ　Ye Htut＜1913－48＞《ウー・トー》　(4)A10

136.イエートゥンリン　Ye Htun Lin＜1910頃－62＞　(3)B5　東亜青年連盟所属

137.ヤンアウン　Yan Aung＜1903－94＞《ウー・ヤンアウン》　(4)A11,12,13,14　『作家』3-5,4-9,5-7,7-27　作家協会会員 タンタン出版社経営　参照97.マハーチョー

138.シェイン (ピー)＃　Pyi Shein[49]　『作家』2-4

139.シュエーチュンマウン (シュエーチュンティン)　Shwe Kyun Maung / Shwe Kyun Tin《マウン・ティンマウン》　『作家』11-13　作家協会43年作文コンテスト一位

140.シュエーセッチャー　Shwe Setkyar＜1913－78＞《ウー・ソウミン》　42年ビルマ仏教連盟[50] 執行委員　43年厚生宣伝省宣伝局タトン県宣伝担当官

141.シュエーダウンピャン＃　Shwedaungpyan　『作家』10-5

142.シュエーピーソウ (ダゴン)　Dagon Shwe Pyi Soe＜1910－95＞《ウー・タンティン》　42年BIAヒンダダ県情報宣伝官　42-44年『バマーキッ』紙厚生宣伝責任者を経て編集補佐

143.シュエーペインタウン　Shwe Pein Thaung＜1908－61＞《ウー・タウンニュン》　(2)A11で43年 Greater Asia 賞受賞　(2)A12　『作家』3-23, 5-13, 6-26　『ミャンマー・アリン』紙編集者

144.シュエーミャー (ダゴン/無)　Dagon Shwe Hmya＜1895－1982＞《ウー・ティン》　『作家』2-30,4-10,6-13,7-22,8-8　参照50.ティン

145.シュエーア　Shwe A　(1)A9,(2)A13,(3)A9　参照111.マウン

146.シュエーウダウン　Shwe U Daung＜1889－1974＞《ウー・ペーテイン》　(1)A8,(3)B7　『作家』1-13,2-24,4-26,5-4,6-17,7-15,9-14

[L]

147.リン (サヤー)　Hsaya Lin　『作家』6-7　43年作家協会名誉会員

148.ラ (ヂィーブワーイエー・ウー)　Kyibwaye U Hla＜1910－82＞《ウー・ラ》　(1)C3,4, (3)A10　チーブワーイエー出版社経営　43年東亜青年連盟マンダレー県議長

49　「Y2」と/h/の結合は特殊な発音[sh]として表記される。

50　[太田1967 : 194-196]によれば，日本軍は1942年3月，ラングーンにビルマ興国仏教連盟を，6月にマンダレーにビルマ仏教連盟を結成させ，7月に両連盟を統合してビルマ僧侶連盟となしたと

149.ラミョウスエー (テッカトウ)＃　Tekkatho Hla Myo Hswe　『作家』10-19

[W]

150.ウィラカ (ウー)＃　U Wilaka　『作家』2-21

151.ウットゥイエードゥー＃　Wuthtu Yedhu　『作家』7-8

152.ウン (ウー)　U Wun　(2)B10　作家協会会員　ラングーン大学ビルマ文学科副講師　教育衛生省教育局翻訳文学分局[51] 勤務　ビルマ学芸院ビルマ語辞典ビルマ百科全書編集事業管理小委員会委員・ビルマ語辞典部責任者 参照109.ミントゥウン

[Th]

153.タードゥン (トーガ)　Tawga Thar Dun《ウー・トゥイン》　『作家』10-11　作家協会42年執行委員　政治評論家　『トウーテッイエー』紙編集者　民防衛訓練所[52] 勤務

154.ターエー (ダニャワディー)＃　Danyawaddy Thar Aye　『作家』3-25

155.タドウタウン　Thadoe Thaung《ウー・タウン》　『作家』10-21　作家協会終身会員[53]

156.ティーリマウン　Thiri Maung　『作家』1-27　作家協会42年副書記長　参照90.バタウン

157.ティーハ　Thi Ha　『作家』1-10, 3-22　『トゥリヤ』誌元エディター

158.トゥカ　Thu Hka＜1910－2005＞《ウー・テインマウン》　(1)A10,11,(2)A14,(4)B1　『作家』2-11, 4-6　チャンダー出版社経営

159.トー (ウー)　U Thaw　作家協会43年検閲担当執行委員

160.テッティン (カティカ・ウー)　Katika U Thet Tin　作家協会会員　作家協会43年文学賞歴史部門審査員

161.ティンカー　Thin Hkar＜1909－97＞《ウー・ティンミン》　(3)B9　『作家』1-19,3-26,5-18,6-20,7-14,8-25,9-20,10-12　作家協会42年執行委員・43年書記長

162.タン (ピー)　Pyi Than　『作家』9-7　参照 91.バタン

163.タンティン (ウー)　U Than Tint＜1908－89＞《ウー・タンティン》ドゥーウン　作家協会43年執行委員・建造物小委員会責任者　『ミャンマー・アリン』紙編集長

164.タンヌエー　Than Nwe ＜1920－2000＞《ウー・タンミン》ピー・タンヌエー　『作家』5-21　作家協会会員　生活協同組合ラングーン責任者

165.テイン (マウン/ウー)　U Thein / Maung Thein　(2)C3　43年作家協会作文コンテスト２位[54]　参照35.ザワナ

される。

51　[Pyankyaye hnit Pyidhu Hsetsanye Uzihtana Sati Aphwe 2006 : 207]の記載による。ただし文学図書分局とは別組織であるか否か不明である。

52　『作家』11号会員名簿の備考による。[太田1967 : 252-253]によれば日本軍は42年12月半官半民の民防衛奉仕隊（Bama Wundan Aphwe）を結成し，43年7月まで訓練所で各県から指導者を集めて訓練した。

53　[Myanmar Naingngan Saye Hsayamya Athin 1943 : 39]によれば，43年9月5日の作家協会第一回年次大会は入会金を5K(チャット)，年会費を10K，終身会費を100Kと定めている。

54　大東亜戦争の特徴を知らしめ，戦争にビルマ国民が意気高く参加させることを目的とした作文

166.テインハン (ウー)　U Thein Han　(2)B10,C3　43年教育衛生省教育局副局長・文学図書分局責任者 ビルマ学芸院ビルマ語辞典ビルマ百科全書編集事業管理小委員会委員 参照37.ゾーヂー

167.テイッパン (マウン)＃　Maung Theikpan　『作家』8-15

168.テイン (ドクター・ウー)　Doctor U Thein　作家協会文学賞政治部門審査員

169.テインマウン (トゥリヤ・ウー)　Thuriya U Thein Maung＜1898－1966＞《ウー・テインマウン》　作家協会42年43年会長・雑誌運営責任者・43年文学賞小説部門審査員 新聞記者協会会長　全ビルマ出版社協同組合議長　政府宣伝諮問委員会委員

170.トンニャ (マウン)　Maung Thonya　『作家』2-10,3-9,4-4　参照42.ニョウトゥン 86.バペー

[H]

171.ハントゥン (タキン)＃ Thakhin Han Htun　『作家』4-13

172.ヘイン (ミョマ・サヤー/ウー/サヤー)　Myoma Hsaya Hein / U Hein＜1905－79＞《ウー・ヘイン》　(2)C3　『作家』1-26,2-16,8-10　作家協会42年43年会計担当執行委員　政府教育衛生省教育局特別役人　マハーバマー党[55] 本部宣伝部長　厚生宣伝省宣伝局副局長[56]

[A]

173.アマー (マ)＊　Ma Amar　＜1915－2008＞《ドー・アマー》　(3)C2　夫・148.ラ

174.アーユ (マウン)＃　Maung Ayu　『作家』5-25,8-11

175.アウントゥー　Aung Htu　(2)A15,(4)A15『作家』1-5,2-29,4-5,6-5,7-32

176.アウンミン (ウー／テイッパン/トゥリヤ)　U Aung Myin / Theikpan Aung Myin / Thuriya Aung Myin　『作家』8-12,10-9　参照 7.チョーゾー　48.ティンテー

177.アウンミャットゥッ (ウー)　U Aung Myat Htut　作家協会43年名誉会員

178.エインダーヌエー　Eindar Nwe　『作家』1-14,3-12　作家協会会員

179.オウッタマターラ (アシン)＃　Ashin Outtama Thar Ra　『作家』9-4

180.オン (ミョマ)　Myoma Ohn＜1911－70＞《ウー・オンマウン》　作家協会43年執行委員

181.オンキン (チヂン・ウー)　Chigyin U Ohn Khin　作家協会43年文学賞政治部門審査員 作家協会会員　タインピェピュ印刷社経営 妻・13.キンキンレー

182．オンペー (ウー)　U Ohn Phe　(2)C3　42-43年教育衛生省教育局ビルマ文学図書分局

コンテスト[Shwe Hmya 1972：437-438]とされるため，一般の応募は考えられず，会員同士で応募した可能性がある。コンテスト特別賞受賞の42.ニョウトゥンは『トゥリヤ』社勤務である旨が受賞者名簿に住所とともに記載されるが，彼の本名は86.バペーであり，現役の編集者である。ここでは35.ザワナが本名テインで受賞したものと考えられる。

55　1944年8月，「独立」1周年を記念し我等ビルマ貧民党を発展させて結成された翼賛政党である。

56　[Soe Nyunt 2005：97]による。ただし[太田 1967：579]では局長の下に第一次長第二次長(84.116の人物参照)が配され，副局長の存在は見出せない。

執筆担当官　ビルマ学芸院ビルマ百科全書校閲副責任者　参照46.テットウ

表II　日本占領期出版書籍

1. 各項目内の書籍配列順は，表Iの配列に準じた著者名による。同一著者の複数の書籍は順不同とした。
2. 配列番号に続き，書名，著者名 (訳者名)，出版社名，価格の記載[57]がある場合は価格を，印刷社の記載がある場合は印刷社名を記し，最後に確認方法を記した。
3. 確認方法は以下のように示している。
   ①　占領期の新刊であり，出版の事実を実物で確認した書籍
   ②　占領期の新刊だが，出版の事実を戦後の第二版等で確認した書籍
   ③　占領期の新刊とされるが，出版の事実を実物で確認できず，当時の広告やその他によって出版の事実が推測される書籍
4. 著者名の下線部は表Iの人名に対応している。
5. 書名中の国名は原文に従い，Burmaはビルマ，Myanmarはミャンマー，Japanは日本，Nipponはニッポンと表記した。

(1) １９４２年新刊書籍

A フィクション

1　親書　ダゴン・キンキンレー著　ダゴン・キンキンレー社刊１K　②[58]
2　彼の妻　ザワナ著　イエーイエータウ社刊　印刷ティーリゼーヨン社　①[59]
3　探偵の知恵　マハースエー著　イエーイエータウ社1月刊　100銭　③
4　作家　メミョ・マウン著　カラウンビャン社12月刊　印刷カルカッタ社　②[60]
5　一つの輪　メミョ・マウン著　アウン社刊　印刷カラウンビャン社　①[61]
6　昼の妻　ミンスエー著　アウン社　75銭　③[62]
7　うねり　ミャミョウルィン著　チーブワーイエー社刊　③[63]
8　最初のサヤー・テイン第二巻　シュエーウダウン著　同社刊　125銭　②[64]

57　[Hla 1968a：143]には42年5月26日『トゥリヤ』紙掲載として，BIA司令部による通貨読み替えの指示が，[同：247-248]には42年9月20日『タインチッ』紙掲載として行政府長官バモーによる同様の指示がなされる。それによれば，日本通貨1ドル(1円)すなわち100銭が1チャット(100ピャー)と等価とされる。本表でチャットはKと記す。英領期1チャットは64ピャーとされ，1ペーが16分の一チャット(4ピャー)，1ムーが8分の一チャット(8ピャー)，1マッが4分の一チャット(16ピャー)とされたが，日本占領期8ペーが5ムーで50銭と，4ペーが1マッで25銭と，2ペーが1ムーで10銭と，1ペーが5銭と等価に改められた。
58　(2)A6に広告が掲載される。[Aung Win 1981-83：30]で42年出版とされる。
59　製本はバズンタウン市立学校製本局とされる。[Aung Win 1981-83：46]は42-43年の出版とし，[Htay Htay Hkin 1983：232-234]は42年の出版とするが，(1)A3の広告が掲載され，42年出版と判断できる。
60　第二版が45年10月カラウンビャン社から刊行された。
61　第二部のみ確認している。[Aung Win 1981-83：130]は42年出版とする。
62　(1)A5に広告が掲載される。
63　『作家』1号(1942年12月刊)に広告が掲載される。[Aung Win 1981-83：179]は42年の出版とする。

9　吝嗇とは　シュエーア著　アウン社刊　③[65]

10 愛してはいる　トゥカ著　チャンダー社刊　②[66]

11 夫をもらうのは　トゥカ著　同社刊　③[67]

B　ノンフィクション

1　ビルマの戦場　ジャパンピャン・ヤカイン・チョー著　イエーイエータウ社刊
　　12ペー　作家協会双書　③[68]

2　おじさんが話そう　ザワナ著　ジャーネージョー社刊　①[69]

3　シュエーダウンの戦闘　ミャダウンニョウ著　アーシャタイ社刊　③[70]

C　翻訳

1　ミカドの義務　ウー・トゥンペー訳　アーシャタイ社刊　③[71]

2　武士道なる英雄の血　ウー・バタウン訳　アリンヤウン社12月8日刊　1円50銭
　　アリンヤウン双書　①[72]

3　花と兵隊　　ウー・ラ訳　チーブワーイエー社刊　125銭　①[73]

4　土と兵隊　ウー・ラ訳　同社10月刊　100銭　①[74]

(2)　１９４３年新刊書籍

A　フィクション

1　袈裟を着る　ザワナ著　ミャンマー・アリン社刊　10K　③[75]

2　ル村とルー村　ウー・ニャーナ著　同社刊　　75銭　①[76]

64　『作家』1号に広告が掲載される。第二版が73年11月ティーダー社から刊行された。

65　(1)A5に出版広告が掲載される。

66　『作家』1号に書評が掲載される。後に演劇として上演され，加筆修整を経て49年シュマワ社から再版された。その序にも42年出版の旨の記載がある。

67　[Hla 1968b：269]に42年12月15日付けの『バマー・キッ』紙における同書の出版広告が掲載される。

68　(1)A2 に出版広告が掲載される。

69　同書にビルマ暦1304年第7の月ダディンジュッ月（西暦1942年10月10日－11月7日）に刊行された旨記載される。

70　『作家』1号に出版が予告される。

71　訳書は訳者名のみで，原著者名や原著は，書籍の表紙にも出版広告にも記載されないことが多い。『作家』1号に出版が予告される。原著を見出すことも今後の課題としている。

72　原著は新渡戸稲造『武士道』“Bushido The Soul of Japan” ― Another of the History of the Intercourse between the U.S. and Japan, The Seeds and Biddle Company, Philadelphia, 1900であり，日本図書翻訳刊行奨励金200ルピーが軍政監部より授与された。200ルピーと200チャットは等価とされる。

73　原著は火野葦平著(1938-39)で，その英訳 “Flower and Soldiers” Translated by Lewis Bush, KENKYUSHA, 1939からのビルマ語訳である。軍政監部より日本図書刊行奨励金200ルピーが授与された。『作家』1号に出版が予告される。

74　原著は火野葦平著(1938)で，英訳 “Mud and Soldiers” Translated by Lewis Bush, KENKYUSHA, 1939からのビルマ語訳である。軍政監部より上記同様の奨励金が授与された。59.ボウ・テインウィンが序を寄せている。

75　『作家』10号(1943年12月または44年1月刊)に出版広告が掲載される。[Aung Win 1981-83：47]は発行部数を100部とする。

76　同書にビルマ暦1305年第五の月ワーガウン月刊(西暦1943年8月1日－29日)と記載される。

3　残酷なことだ　タキン・ヌ著　ダゴン・キンキンレー社刊　②[77]
4　逆さま時代　マハースエー著　①[78]
5　知恵者　マハースエー＋トゥカ著　イエーイエータウ社刊　125銭　①[79]
6　刀　ミンスエー著　アウン社刊　印刷タインピェピュ社　②[80]
7　疎開娘　ミンスエー著　同社刊　①
8　復讐　ミンスエー著　ミャンマー・ヨウッシン社刊　①[81]
9　この世の涅槃　ヤンアウン著　マウービン社刊　10ドル　③[82]
10 兵士と愛妻　ヤンアウン著　タンタン社刊　125銭　③[83]
11 ボウ・アーシャ　シュエーペインタウン著　ミャンマー・アリン社刊　１K　①
12 愛と戦争　シュエーペインタウン著　同社刊　③[84]
13 新時代のヤンゴンとは　シュエーア著　ミャンマー・ヨウッシン社刊　8K　①[85]
14 愛したくないならそのままで　トゥカ著　イエーイエータウ社刊　③
15 新聞記者作家　アウントゥー著　ミャンマー・アリン社刊　150銭　①

B　ノンフィクション

1　日本語学習　サヤー・チョー著　カウィメイスエー印刷社刊　③[86]
2　日本文字掛図　サヤー・チョー著　同社刊
3　二種類の日本文字　サヤー・チョー著　同社刊
4　日本語基礎練習１　サヤー・チョー著　同社刊
5　日本語基礎練習２　サヤー・チョー著　同社刊
6　日本語三ヶ月　サヤー・チョー著　同社刊
7　遊戯全集　ウー・サンマウン著　ビルマ政府教育省教育局文学図書分局刊
　　文学図書双書５　①[87]
8　合同売買　ナガーニー・ウー・トゥンエー著　ミャンマー国作家協会刊
　　２K　印刷トゥリヤ社　ミャンマー国作家協会双書　①[88]
9　私の冒険　タキン・トゥンオウッ著　ドバマー社刊　印刷タインピェピュ社　①
10 ビルマ歴史物語　ウー・テインハン＋ウー・ウン著

77　[Aung Win 1981-83 : 89]で43年刊とされる。83年第三版が刊行された。
78　出版社名出版年は記載されない。[Aung Win 1981-83 : 112]は出版年のみ43年とする。
79　[Aung Win 1981-83 : 119]では43年発行で部数が2000部とされる。トゥカの作品は1940年ズエー出版社刊の再録である。
80　(2)A8に来週発売との広告がある。2001年第六版が刊行された。
81　49年『悪い血』と改題され，チェーニー社から再刊された。
82　価格も出版年も[Aung Win 1981-83 : 202]による。10ドルは10チャットである。注57も参照されたい。
83　『作家』5号(1943年5月刊)と6号(1943年6月刊)に出版広告が掲載され，169.トゥリヤ・ウー・テインマウン監修である。
84　(2)A11に出版広告が掲載される。
85　『作家』8号(1943年8月刊)にも出版広告が掲載される。
86　以下(2)B6まですべて『作家』3号(1943年2月刊)，4号(1943年3-4月刊)，5号に広告が掲載された。
87　129.ウー・ミャッソウ監修で，序文は文学図書分局長による。
88　序に43年4月12日と記載され，『作家』7号(1943年7月刊)に広告が掲載される。

ビルマ政府教育省教育局文学図書分局刊　文学図書双書２　①

11 基礎ビルマ史　ウー・バニュン著　同分局刊　文学図書双書３　①[89]

12 レッウェー・トンダラの戦術戦争史と戦術叙事詩　ハンターワディー社　①[90]

13 三十人の同志　ミャダウンニョウ著　ミャンマー国作家協会1月27日刊
一般3円　兵隊250銭　①[91]

14 パーリ問題　ウー・ミンスエー　パーリ語普及協会刊　③

C　翻訳

1　ニッポン文化史　ターガヤ・ガ・ソウ訳　アリンヤウン社刊　150銭
アリンヤウン双書２　①[92]

2　ニッポン精神　ゼーヤ訳　ミャンマー国作家協会刊　3K　印刷カウィメイスエー社
作家協会双書２　①[93]

3　ニッポン民話　ウー・オンペー＋ウー・テイン＋ウー・ヘイン＋ウー・テインハン訳
ビルマ政府教育省教育局文学図書分局刊　75K　印刷ハンダーワディー社　文学図書双書１　①[94]

(3)　１９４４年新刊書籍

A　フィクション

1　詩人　ダゴン・キンキンレー著　ダゴン・キンキンレー社刊　100K　②[95]

2　戯曲新生ビルマ　ニャーナ著　ミャンマー・アリン社刊　①[96]

3　戯曲英雄の母・何が最重要か　マウン・ティン著　タインピェピュ社刊　②[97]

4　彼女　ジャーネージョー・ママレー著　ジャーネージョー社刊　②[98]

5　好きなものを選び取れ　マハースエー著　ズエー社刊　①

6　僕が君なら　マハースエー著　キンエーチー社刊　印刷タインピェピュ社　①

89　166.ウー・テインハンが監修し，文学図書分局長による序に43年8月14日と記される。

90　レッウェー・トンダラ(1723-99)はビルマ族最後の王朝コンバウン朝の大臣で宮廷詩人であった。監修者は90.ウー・バタウンで，2.タキン・コウドーマインが序を寄せている。

91　169. ウー・テインマウンが序文を寄せる。

92　日本図書刊行奨励金200ルピーが軍政監部から授与された。『作家』5号に広告が掲載される。原著は嘉治隆一著国際文化振興会編『日本文化の発展』1939 “JAPAN HER CULTURAL DEVELOPMENT” である。

93　原著は稲原勝治著日本外事協会S18 “ESSENTIALS of JAPANESE SPIRIT” TOKYO PRESS ASSOCIATION, 1943である。

94　180.ウー・オンペーが監修する。序では，Japanese Tales of All Ages, Fairy Stories From Japan, The Book of Wonder, The Book of Treasure, The World's Greatest Short Stories, The Romance of The Milky Way等から選んだ物語を意訳したと述べられる。これらのうち，“Japanese tales of all ages” by Omori Harris, with illustration by Shujaku Suzuki, The Hokuseido Press, 1937, “FAERY STORIES FROM JAPAN” Grade II No.128, Anorld & Son, Ltd., Leeds, Glasgow & Belfast (出版年記載なし), “The Romance of The Milky Way” by Lafcadio Hearn, Houghton Mifflin Company, Boston and New York, 1905を確認している。

95　1935年より『ダゴン』誌に連載されていた未完の長編で，一般には1951年に3巻が一括出版されたとされるが，(3)A6に1000部発行との出版広告が掲載される。

96　表紙にビルマ暦1306年第三の月ナヨン月白分12日(西暦1944年6月2日)との日付が記される。

97　1957年テイディ社から第二版が発行された。

98　発行部数は1000部とされる。1971年アヌピンニャ社から第二版が発行された。

7　メーミョ・マウン選集　メーミョ・マウン著　マウン・ミャンマー社刊　③[99]
8　殺す勇気のある人　ミンスエー著　アウン社刊　印刷ミャンマー・ヨウッシン社　①[100]
9　疎開とは　シュエーア著　マウン・ミャンマー社刊　①[101]
10 祈念する男　ウー・ラ著　チーブワーイエー社刊　25K　①

B　ノンフィクション

1　女性の手引き　ドー・チーチー著　タインピェピュ社刊　5K　①[102]
2　食す人　マハースエー著　ズエー社　　印刷タインピェピュ社　①[103]
3　金のハンマー　ミンダー著　トゥリヤ社　3K　③[104]
4　ビルマの刀剣思想　ミャダウンニョウ著　印刷ミャンマー・ヨウッシン社　①[105]
5　力　イエートゥンリン著　ズエー・サーペー社刊　印刷タインピェピュ社　①
6　大東亜戦争と共栄体制　ウー・バシン著　アジア青年連盟刊　アジア青年双書１　①[106]
7　栄養と健康　シュエーウダウン著　チーブワーイエー社刊　17.5K　②[107]
8　鋭利な人　ウー・ラ著　チーブワーイエー社刊　17K50P　③[108]
9　養鶏法　ティンカー著　③[109]

C　翻訳

1　徴用編集者　ターガヤ・ガ・ソウ訳　アリンヤウン社　①[110]
2　麦と兵隊　マ・アマー訳　チーブワーイエー社　15K　①[111]

(4) 出版年の確定が出来ないが占領期出版の可能性が高い書籍

A　フィクション

1　黄金富豪　ダゴン・キンキンレー著　ダゴン・キンンキンレー社刊　②[112]

99　(3)A9に出版広告が掲載される。
100 ビルマ暦1306年第七の月ダデインジュッ月(西暦1944年9月17日－10月15日)の発行とされる。
101 普及販売はヤンゴンでは作家協会が，地方ではトゥリヤ社が担当する旨の記載がある。
102 家事全般のガイドブックであり，1947年に第二版がミャンマー・ユニオン社から出版された。
103 (3)B5,(3)B7とともに健康法に関するものである。
104 書名は三十人の同志の一人ボウ・ミンガウンの別名で，その伝記とされる。(3)A9に掲載された広告では，ウー・テインマウンの監修であることを記すほか，「ミンダーと称する作家が執筆した」という表現で著者が某作家の別称であることをほのめかす。[南田2011a]のリストには作者を実在として扱ったが，本名不詳のため本表1の107.では＃を付した。
105 他の一部の書籍同様出版社の明示がない。文末の日付は1944年10月5日である。
106 連盟議長ウー・バジャンが序文を寄せる。アジア青年連盟はビルマ語からの直訳で，東亜青年連盟と同義である。注5も参照されたい。
107 (3)A10に出版広告が掲載される。1990年第5版がヨーミンヂー社より出版される。
108 (3)A10に出版広告が掲載される。
109 『作家』11号(1944年6-7月刊)に正続2冊で5Kと広告が掲載されるが，著者名出版社名はない。(3)A6の広告には著者名が記載される。
110 藤井龍樹著日本タイムズS18発行 “Singapore Assignment”のビルマ語訳であり，21.ジャーネージョー・ウー・チッマウンの序文がある。
111 (3)A10に広告が掲載される。原著は火野葦平著(1938)で，英訳 “WHEAT AND SOLDIERS” translated by BARONESS SHIDZUE ISHIMOTO, FARRAR & RINEHERT, Inc. New York Tronto, 1939のビルマ語訳である。
112 [Aung Win 1981-83 : 29]で初版1938-44とされる。1945年第二版がダゴン・キンキンレー社より出

2　真の警官　テイパン・チョーティン著　チョーゾー社刊　③[113]
3　我らに相応せず　ソーウー著　ジャーネージョー社刊　③[114]
4　彼と我　テイティン・サカーヂー著　トウーテッイエー社刊　③[115]
5　僕の夫　ザワナ著　ティンティンエー社刊　③[116]
6　愛の苦悩　マハーチョー著　チョーゾー社刊　印刷トウーテッイエー社　①[117]
7　愛してくれる？　マハーチョー著　同社刊　③[118]
8　愛が何だ！　マハーチョー著　同社刊　③
9　作家　マハーチョー著　同社刊　③
10 愛の館　イエートゥッ著　ズエー社刊　③[119]
11 肩身の狭い人　ヤンアウン著　チョーゾー社　①
12 美しい弟子　ヤンアウン著　同社刊　③
13 切なくさせる　ヤンアウン著　同社刊　③
14 ああ，愛，愛と　ヤンアウン著　同社刊　③
15 夫泥棒　アウントゥー著　トゥリヤ社刊　③[120]

B　ノンフィクション

1　ニッポン語初級練習１　トゥカ著　チャンダー社　①[121]
2　教育上巻　①[122]
3　教育下巻　①

なお表IIは，日本占領期に広告が掲載された書籍のうち新刊ではなく既刊･再刊であることが判明したもの[123]，日本占領期に出版されたとの言及や推測がなされるが書誌情報

る。
113 (4)A11に広告が掲載される。
114 [Soe Nyunt 2005 : 100]で戦時中の出版とされる。
115 [Aung Win 1981-83 : 87]で1943年出版とされる。著者は43年没で，生前の出版の可能性が高い。
116 [Htay Htay Khin 1983 : 226]では「194?年」出版とされる。1965年第2版がドゥーウン社から，2004年第三版がガンゴーウッイー社から出版される。
117 (4)A11と合本で出版された。[Aung Win 1981-83 : 200-201]でともに1942-44年の出版とされる。
118 (4)A8,9,12,13,14とともに (4)A11に広告が掲載される。
119 [Aung Win 1981-83 : 188]で42-43年出版とされる。
120 [Aung Win 1981-83 : 263]では41-44年出版とされる。
121 着物姿の日本女性の図を表紙に用いるため占領期の出版と考えられるが，出版年の記載がない。
122 上巻下巻とも，1942年9月の教員養成講座の開会式閉会式の講演集であり，1942年末または遅くとも1943年の出版と考えられる。書籍の表紙等が破損しているため，出版社等は不明である。
123 占領期の検閲を通過した媒体に掲載されており，価格の明示もあるため参考までに，次に提示しておく。下線部は表I掲載の作家名に対応する。チーブワーイエー社刊には，フィクションは『男の目算』(ピーモウニン著１K)，『小説選集』(マハースエー著75銭)，『政治短編小説』(同50銭)，『僧侶職』(ミャミョウルィン著75銭)，『突破口』(イエートゥンリン著75銭)，『最初のサヤー・テイン　第１巻』(シュエーウダウン著75銭)，ノンフィクションは『心理学』(ピーモウニン著１K)，『評論集』(タキン・バタウン著25銭)，『鑑定文書』(同25銭)，「イエー新聞論説集」(1939マハースエー著25銭)，『マハーバーラタ解説』(ミンシンナウン著１K)，『カーリダーサ解説』(1936同　特別版150銭)，『ナッ』(サヤー・ムンヂー著25銭)，『頂上へ』(1940ウー・ラ 1K)，『インドの農業』(著者名なし150銭)，翻訳が『サンダー・マーラー上下』(1940モリス・コリス著マ・アマー訳各75銭)，『事件』(1938同著同訳75銭)があり，ほかにフィクションで『血』(ミンスエー著アウン社1940年上巻41年下巻出版1942年合本で再刊１K)，『二重の

が不足するのもの[124]，出版計画は日本占領期の広告等から見出せたが出版の事実が確認できなかったもの[125]は除外している。

参考文献

（ビルマ語）

Aung Maw, 1979, “Ye Kyaw Tawaik”, *Moe Way Magazine,* Aug., Yangon, pp.56-58.

Aung Win,1981-83, *Myanmar Wuthtushe Sazu Sayin (1931-44)*, MA thesis Yangon University transcript. Yangon.

Ba Than, UPI, U, 1978, “Myanmar Naingngan Dhadinza Thamaing”, *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Sapay Beikman Press, Yangon, pp.1-75.

Ba Thaung, Bohmu, 2002, *Sahsodawmya Athtoupatti*, Yape Saouk Press, 5th ed., Yangon.

Hla, Ludu, U, 1968a, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol.1, Kyibwaye Press, Mandalay.

—— 1968b, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol.2, Kyibwaye Press, Mandalay.

—— 1968c, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol.3, Kyibwaye Press, Mandalay.

—— 1968d, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol.4, Kyibwaye Press, Mandalay.

Htay Maung, 2002, “Sit atwin Kala Saouk Sadanmya”, *Longmalay Magazine*, Oct., Yangon, pp.136-139.

Htay Htay Khin, Ma, 1983, *Zawana Sazu Sayin*, MA thesis Yangon University transcript, Yangon.

Htin Gyi, Tekkatho, 1992, *Myanmar Naingngan Dhadinzamya Ahnyun*, Sapay Beikman Press, Yangon.

Khin Htun, 1975, *Maha Hswe Sazu Sayin*, MA thesis Yangon University transcript,Yangon.

Kyi Nyunt, Chitkyiye, 1970, *Thamaingwin Thuriya-Myanmar Alin hnit Myanmar Naingnganye*, Chitkyiye Sapaytaik, Yangon.

Lwin, Thakin, 1969, *Japan Hkit Bama Pye*, Udan Sapay Press, Yangon.

愛』(1938-39マハースエー著キンエーチー社)，『良友』(1937同著同社)がある。

124 フィクションでは『薄墨なりや　詩人短編小説集』(1944グエーターイー著)，『女預言者』(ニャーナ)，『解けぬ結び目』(1943ピャンティン)，『二匹のジョーカー』(1942-44マハースエー)，『愛の血は沸き』(1943-44同)，『愛の旋回』(1944同)，『刃の鋭い人』(1944同)，『四人集』(1944同)，『抗爆弾薬』(ヤンアウン)，『赤光』(1942ワズィーヤ著イエーイエータウ社)，『彼ら』(ミョマ・オン)，『女ジョーカー』(1942同)，『戯曲綱の切れた牡牛と狂気の俗人』(ウー・ヌ)，ノンフィクションとしては『科学の鏡』(作家協会双書)，翻訳としては『大地』(パール・バック著ダゴン・キンキンレー訳とされるがソーウーの訳という説もある)，『海と兵隊』(火野葦兵著ウー・ラ訳チーブワーイエー社) などがある。なお，1945年出版書籍は多数を確認しているが，大半が45年8月以降の発行であり，8月15日直前の発行のものも表現等から日本側の検閲がすでに機能していないことがうかがえるため本稿のリストからは割愛している。

125 表II(2)C2には冒頭の作家協会会長挨拶で，ビルマ暦1305年(西暦1943年4月5日－44年3月23日)の間に協会が発行する計画である書籍15点が挙げられる。そのうち発行された(2)B8(2)C2以外の書籍は「ミャンマー国の戦闘」(タキン・バヘイン)，『ニッポン文学史』(ザワナ)，『大東亜共栄圏』(ウー・チッマウン)，『南部の国々』(同)，『東亜の新しい光』(ミョマ・マウン)，『英雄物語』(ミャダウンニョウ)，『簡略日本史』(ゼーヤ)，『女性たちとこの大戦』(サヤー・ヘイン)，『アジアの茶　神の茶』(ゼーヤ)，『ミャンマー文化』(ディードウ・ウー・バチョウ)，『東洋の文化』(ウー・バシン)，『五千万へ』(ダゴン・ナッシン)，『ミャンマー・日本語辞典』(サヤー・チョー) である。

Malihka, 1974a, *Myanmar Sapay Abeidan*,Vol.1, Thissa Sapay, Yangon.

—— 1974b, *Myanmar Sapay Abeidan*, Vol.2, Thissa Sapay, Yangon.

—— 1977, *Myanmar Sapay Abeidan*, Vol.3, Thissa Sapay, Yangon.

Mya Han, Maung, Maha Weiza, 1981, *Koloni Khit Myanmar Thamaing Abeidan*, Zaw Naing U Sapay, Yangon.

Myanmar Naingngan Sapay hnit Sanezin Aphwe, 2004, *1366-khuhnit Myanmar Naingngan Sahsodawne Akhanana*, Myanmar Naingngan Sapay hnit Sanezin Aphwe, Yangon.

—— 2007, *1369-khuhnit Myanmar Naingngan Sahsodawne Akhanana*, Myanmar Naingngan Sapay hnit Sanezin Aphwe, Yangon.

Myanmar Naingngan Saye Hsayamya Athin, 1943, *Saye Hsaya*, No.9, Thuriya Press, Yangon.

—— 1944a, *Saye Hsaya*, No.10, Thuriya Press, Yangon.

—— 1944b, *Saye Hsaya*, No.11, Thuriya Press, Yangon.

Myanmar Pye Saye Hsayamya Athin, 1942, *Saye Hsaya*, No.1, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943a, *Saye Hsay*a, No.2, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943b, *Saye Hsaya*, No.3, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943c, *Saye Hsaya*, No.4, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943d, *Saye Hsaya*, No.5, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943e, *Saye Hsaya*, No.6, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943f, *Saye Hsaya*, No.7, Thuriya Press, Yangon.

—— 1943g, *Saye Hsaya*, No.8, Thuriya Press, Yangon.

Myanmar Thamaing Aphwe, 2004, *Myanmar Thamaing Aphwe Naukkhan Thamaing hnit Aphwewinmya i Athtoupatti*, the University Press, Yangon.

Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana Sati Aphwe, 2003, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.1, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.

—— 2006, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.2, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.

—— 2007, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.3, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.

—— 2008a, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.4, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.

—— 2008b, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.5, SEIKU CHO CHO Sapay, Yanhgon.

—— 2008c, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol.6, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.

—— 2008d, *Hnahse-yazu Sahso Sithemya*, Vol.1, Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.

—— 2009, *Hnahse-yazu Sahso Sithemya*, Vol.2, Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.

Pyi Soung(Thway Thauk), 2009, *Dutiya Gaba Sitkyi atwin Japan Letauk Yaukkezin*, SEIKU CHO

CHO Sapay, Yangon.

Sapay Beikman Aphwe, 1985, *Myanmar Swezonchan Hnitchouk*, Sapay Beikman Press, Yangon.

—— 1997, *Myanmar Swezonchan Hnitchouk*, Sapay Beikman Press, Yangon.

—— 1998, *Myanmar Swezonchan Hnitchouk*, Sapay Beikman Press, Yangon.

Shwe Ouk O, 1997, *Tacheinga Htinshagedhaw Pougogyimya*, Wint Myint Aung Sapay, 2nd ed., Yangon.

Soe Nyunt, Yapye, U, 2005, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya 100*, Yapye Saouk Press, Yangon.

Shwe Hmya, Dagon, 1972, *Myanmar Naingngan Sapay Hsumya*, Sapay Beikman Press, Yangon.

Thamaing Thutethana Uzihtana (edited), 2011, *Khit Yezi htega Pougomya*, Thamaing Thutethana Uzihtana, Nepyidaw.

Tint Win Naing, U, 2002, *Thalun Ingareik-Myanmar Eikhsaung Pyekhkadeing*, Kyi Thar Sapay Press, Yangon.

(英語)

Minamida, Midori, 1987, “Anti-Fascist Writings of Thein Pe Myint”, *BURMA AND JAPAN*, Burma Research Group, Tokyo, pp.85-101.

—— 2007, “Burmese Literature Written in the Dark”, Kei Nemoto, *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma (1942-45)*, Research Institute for Languages of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, pp.113-139.

People’s Literature Committee and House, 1961, *WHO'S WHO IN BURMA*, People’s Literature Committee and House, Rangoon.

(日本語)

大阪外国語大学アジア研究会, 1995,『1940年代アジア総合年表』, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪.

太田常蔵, 1967, 『ビルマにおける日本軍政史の研究』, 吉川弘文館, 東京.

大野徹, 2000, 『ビルマ(ミャンマー)語辞典』, 大学書林, 東京.

高見順, 1965, 『高見順日記』上巻, 勁草書房, 東京.

原田正春・大野徹, 1990, 『ビルマ語辞典』, 日本ビルマ文化協会, 再版, 大阪.

南田みどり, 1994,「事実が虚構をしのぐ時代の文学―テインペーミンの抗日時代」, 『大阪外国語大学アジア学論叢』Vol.4, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪. pp.107-163.

—— 2009,「誰が検閲者だったのか？―日本占領期のビルマ文学は語る」, 『日本翻訳家協会』No.188, 日本翻訳家協会, 東京, pp.2.

—— 2010a,「日本占領期におけるビルマ文学―小説の役割を中心に―」, 『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号, 大阪大学世界言語研究センター, 大阪, pp.109-136.

—— 2010b,「短編小説の語るビルマ文学最前線」,『EX ORIENTE』Vol.17, 大阪大学言語社会学会, 大阪, pp.113-140.

—— 2011a,「日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について」,『大阪大学世界言語研究センター』第5号, 大阪大学世界言語研究センター, 大阪, pp.143-171.

—— 2011b,「ビルマ語版『ビルマの竪琴』は何を語る？」,『世界文学』No.113, 世界文学会, 東京, pp.29-41.

—— 2011c,「ビルマ文学と戦争―アジア太平洋戦争を中心に」,『コレクション　戦争と文学４　9・11変容する戦争』月報3, 集英社, 東京, pp.9-12.

本稿は，2001年度－2005年度アジア・アフリカ言語文化研究所共同プロジェクト「日本占領期ビルマ（1942－45年）に関する総合的歴史的研究」における研究活動を基礎に，平成21年度22年度23年度の日本学術振興会・科学研究補助金，基盤研究（ｃ）「ビルマ文学史における日本占領期」の研究成果を取り入れたものである。またビルマ国内の文学関係者をはじめとする多くの方々からのご協力にも心から感謝を捧げたい。

(2011. 11. 24 受理)